



会長挨拶 会長 鈴木孝純君

1月は“行く”、2月は“逃げる”、3月は“去る”とよく言われます。1月は新年を迎えたもののその慌ただしさに時間が足りず、2月はそもそも日数の少なさに溜め息をもらし、3月は年度の始末に追われ気がつく時期は過ぎていたと、毎年のことながら時の流れの速さをつくづく感じます。

さて、現在、ミラノ・コルティナ冬季五輪が開催されており、日本人、特に若手の活躍が毎日報道されています。そのような中で、海外の選手も含めて、予選で高得点を出して金メダル有力と言われながらも、期待に沿えず敗れ去る選手の姿を見るたびに、サッカー名選手フ란ツ・ベッケンバウアーの言葉を思い出します。

「強い者が勝つのではない、勝った者が強いのだ」

これは、1974年のワールドカップ西ドイツ大会で、「皇帝」とまで呼ばれたサッカー名選手フ란ツ・ベッケンバウアーが、優勝の時に堂々と saying のけた言葉です。

彼自身3度目のワールドカップ出場、しかも地元開催という重圧の中で決勝まで進出。そして、圧倒的な強さで世界の多くの人々が優勝を予測していたオランダを2対1で下し、20年ぶり2度目のワールドカップ制覇を成し遂げたのです。斬新な戦術と強靱な攻守力を誇っていたオランダでしたが、彼は沈着冷静にチームをまとめ、既成観念に囚われない独創的な戦法での勝利でした。

「強い者が勝つのではない、勝った者が強いのだ」というフレーズは、10年ほど前の日本のある新聞社の調査で一番好きな格言・名言の第1位となりました。

何故、外国人スポーツ選手の言葉が私たち日本人から支持を得たのでしょうか。単に優勝候補を破ったからだけではないはずです。

それは、自慢せず、控え目を美德としていながらも、ここぞという時には期待に応えて本来の力を発揮することをよしとする日本人の国民性に由来していると思います。

「能ある鷹は爪を隠す」という諺があります。才能や実力のある者は軽々しくそれを人にさとらせない慎みがあるが、いざという機会ではその真価を発揮するという意味で、正に日本人の心の働きの美点を示していると思います。さらに、感情を抑制しつつも内に秘めた情熱は常に行動に進む準備が整っているという“武士道”の心構えにも繋がっています。

ベッケンバウアーの言葉は当たり前のことかもしれませんが、しかし、相手が強豪であろうとも、強い信念のもと謙虚に粘り強く挑み、「勝った者が強いのだ」と言って胸を張る言葉からは獅子吼にも似た自負や気概が感じられるからこそ、日本人の共感を呼んでいると思います。



ゲスト 株式会社パレッジ代表取締役 茂木菜々絵様



幹事報告 小野寺佳克君

鶴岡西ロータリークラブ
60周年記念式典
4/18 グランドエル・サン



米山奨学生 ウセイさん

地区 2800地区 米山奨学生歓送会



出席報告 会員数 32名 / 出席数 22名 / 出席率 68.75% / 前々回出席率 65.63% / 修正出席 25名 / 確定出席率 78.13%